

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 菫澤久樹

所属: 千葉県立野田特別支援学校

記録日: 2016年 2月27日

キーワード: 知的障がい 社会生活 意思の表出 コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年

高等部 1年 男子

・障害名

知的障がい

・障害と困難の内容

- ・発語がない。
- ・要求の表出は身振り、簡単な手話（好き、楽しい、トイレ、遊び等）、相手の手を引くことが主体。
- ・言葉がけや文字（平仮名、片仮名、学校生活でよく使用される漢字）、絵カード、シンボル、画像などから見通しをもつことができる。日常生活の中での語彙については、ほぼ理解をしている。
- ・自分から人に関わろうとする気持ちはあるが、詳しく気持ちを伝えきれない。
- ・慣れた場所、相手であれば本人の気持ちを推測し理解できるが、そうでない場合は理解しづらい。
- ・相手の話を聞き、「はい」「いいえ」で答えることがほとんどで、コミュニケーションが受け身になりがち。

【活動目的】

・当初のねらい

- ・DropTalk HD（ドロップトーク HD）の活用を通じ、音声で自分の意思を伝える手段を広げる。
- ・自己選択、自己決定ができる場面を増やし、見通しを持たせていくことで、自分の思いや願い伝える意欲を育てる



・実施期間

平成 27 年 6 月～平成 28 年 2 月

・実施者

菫澤久樹

・実施者と対象児の関係

学級担任

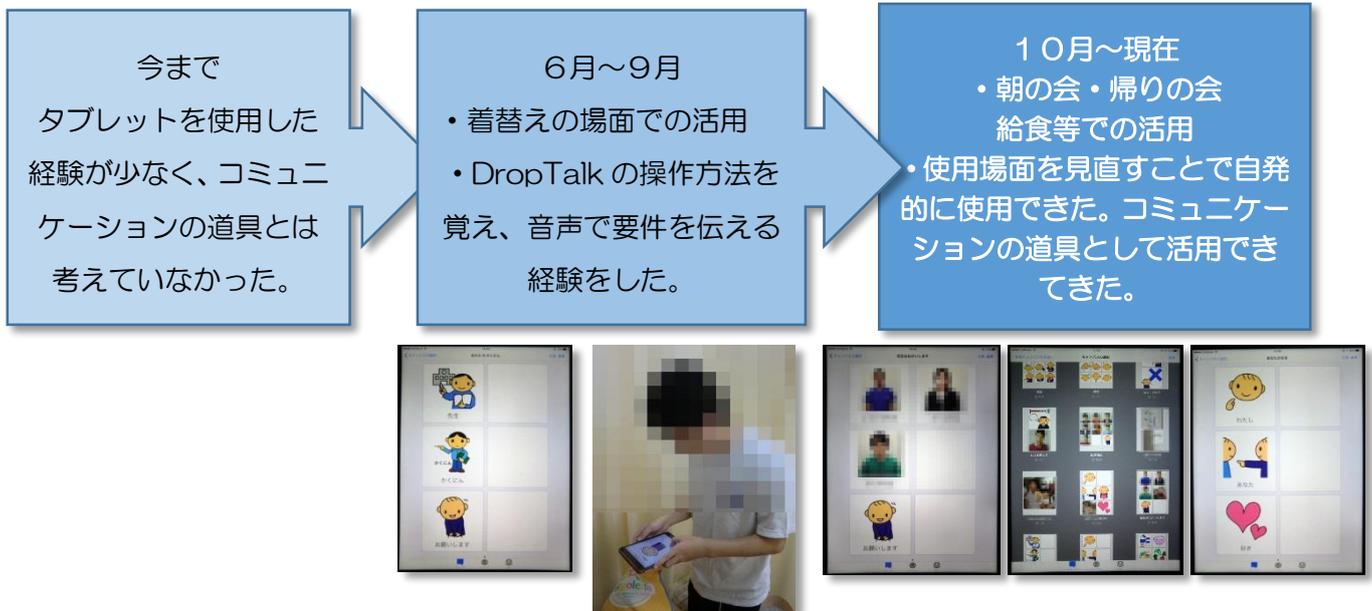
【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

中学部の頃、単発的に iPad を使用したり、家庭でもタブレットを用意して試してみたりしたがあまり興味関心がなかった。iPad の操作に慣れてもいなく、アイコンを押して音声を出す、音声で教師を呼ぶという経験をしていなかった。

・活動の具体的内容

6月～9月は、毎日の活動の中で iPad の操作に慣れ、音声で相手に伝える経験をするを目的として、着替え後、身だしなみ確認での活用を設定した。着替えが終了したら DropTalk HD (以降 DropTalk) のキャンパスで「先生」「確認」「お願いします」と順にアイコンを押して伝えられるようにしていった。CDラジカセ、デジカメの操作は好きでよく使っていることもあり、iPad のオン・オフ、フリックやタップ等の基本的な操作や DropTalk のキャンパス・シンボル選択の操作はすぐに覚えた。しかし、本人があまり必要性を感じていなかったこともあり、自発的な行動にはつながりにくかった。そこで、10月より自発的に活用できるように、以前は現物を示して伝えていた給食のお代わりの場面で使用したり、友達に手話や文字で「好き」と伝えていたことを分かりやすく音声で伝えたりした。また、朝の会・帰りの会の司会進行において、指さしや視線合わせより、皆に共有しやすい音声での出欠確認、生徒や教師の指名に使用していった。



・対象児の事後の変化

<朝の会>

指さしや相手に視線を向けるだけよりも分かりやすく明確になり、呼ばれた友達はすぐに返事をするようになった。他の生徒は対象生徒により注目するようになり、教師が間に入らないで出欠確認、指名ができるようになった。一人で朝の会が進められるようになってきた。



<給食>

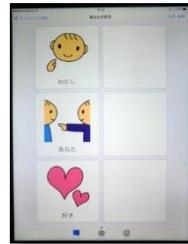
給食のお代わりにの要求は直ぐに理解をして活用ができた。主に牛乳をお代わりにすることが多いが、その他の物を伝えることもあった。



牛乳おかわりする

<好きと伝える場面>

帰り際、自ら iPad を机の中から取りだして、昇降口に持って行き、「わたし」「あなた」「好き」とアイコンを押して伝えた。伝えられた友達は嬉しそうに聞いたり、iPad の画面を覗き込んだりしていた。お互い楽しそうにしていた。他者がそのやりとりを見て、対象生徒の周りに人が集まってくることもあった。また、自分の席に座りながら、嬉しそうに画面を見て「好き」という言葉を繰り返し再生している様子が見られた。



わたし
あなた好き

ふふんっ
(^^♪

何を楽しそうに話をしているの？

えっ！ぼくのが好き！！
ありがとう♪
照れるな～

わたし あなた 好き



(嬉しそうに iPad の画面を眺めているところ。)

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ①場面を限定し、伝えることを明確にすることで音声を使用したコミュニケーションの道具として理解するようになってきたのではないかな。
- ②音声で情報を共有する意義や楽しさを実感できるようになってきたのではないかな。
- ③DropTalk の活用を通してコミュニケーションを広げる切っ掛けとなったのではないかな。
- ④朝の会、授業等で必ず行う活動として生徒が認識したもの、生徒自信が好きなこと、伝えたいと思うことが自発的な活用につながるのではないかな。逆に教師がつくった場面設定で、生徒が必要を感じていないこと、興味関心がないことはなかなか活用結びつかないのではないかな。

・エビデンス(具体的数値など)

- ①複数あるキャンバスから場面にに応じて必要なキャンバスを選択し、伝えることができた。
- ②自分から積極的に iPad を取り出して DropTalk を操作し、友達に「好き」と伝えたり、他者にこの友達が好きなことを伝えたりして気持ちを共有しようとしていた。
- ③対象児の周りに人が集まり、本人が使用したり、他者が使用したりすることで会話が弾み、笑顔が増え、コミュニケーションの輪が広がっていった。
- ④朝の会や給食では自ら進んで DropTalk を使用していた。iPad を教室の机の中から取り出し、昇降口を持って行って、友達に「好き」と伝えていた。着替えの場面での確認要求は忘れることが多く、促さないとも使用しないこともあった。

・その他エピソード(画像などを含めて)

DropTalk の音声で伝えるということを理解し活用できるようになってきたので、試しに使用場面を増やした。薄着で寒そうな格好をしている時、寒いのか、暑いのか、こちらからの問いかけに返答が曖昧でよく分からない時があった。そこで、体調等、自分の状態を伝えるキャンバスを作り、訪ねると、「暑い」「寒い」「元気」等と答えることができた。生徒主導の活動ではないが、様々な活用経験を通して、使い方やシンボルを覚え、その後、生徒自ら伝えられるようにしていきたいとも考えている。



帰りの会において、「今日の出来事」というその日の活動を振り返り、生徒が感想を言う活動を行っている。そこで「楽しかった」「嬉しかった」「大変だった」等の感想を音声で伝えていった。手話や身振りだけよりも、友達と気持ちや情報を共有しやすくなり、友達や教師から、「そうだったのか」「すごいね」等と声があがった。

また、好きな友達からの「僕のことが好き?」「今日、一緒に遊ぼう」等の質問や誘いに「はい」「いいえ」で答えることもあった。iPad の画面を見て 2 人で楽しさを共有していた。

友達と一緒に写真を撮り、DropTalk で、「ぼくと〇〇くんは仲良しです」と音声を入れアイコンをつくり対象生徒に見せたところ、生徒は喜んでそのアイコンを友達や教師に見せて自分の気持ちを伝えていた。



対象生徒が iPad を提示することで、取り巻く友達や教師が DropTalk を活用して対象生徒とやり取りすることも増えた。今後、気持ちや情報を共有する楽しさを味わい、様々なことを自ら伝えられるようになっていって欲しいと願っている。



(帰り際、好きな友達とやりとりしている様子)